

わたしのマル わたしの祈り

詩・工藤恵美子 絵・寺前佳名子 文・松崎 慧



青灯詩舎

わたしのマル わたしの祈り

詩・工藤恵美子 絵・寺前佳名子 文・松崎 慧



青灯詩舎

わたしのマル



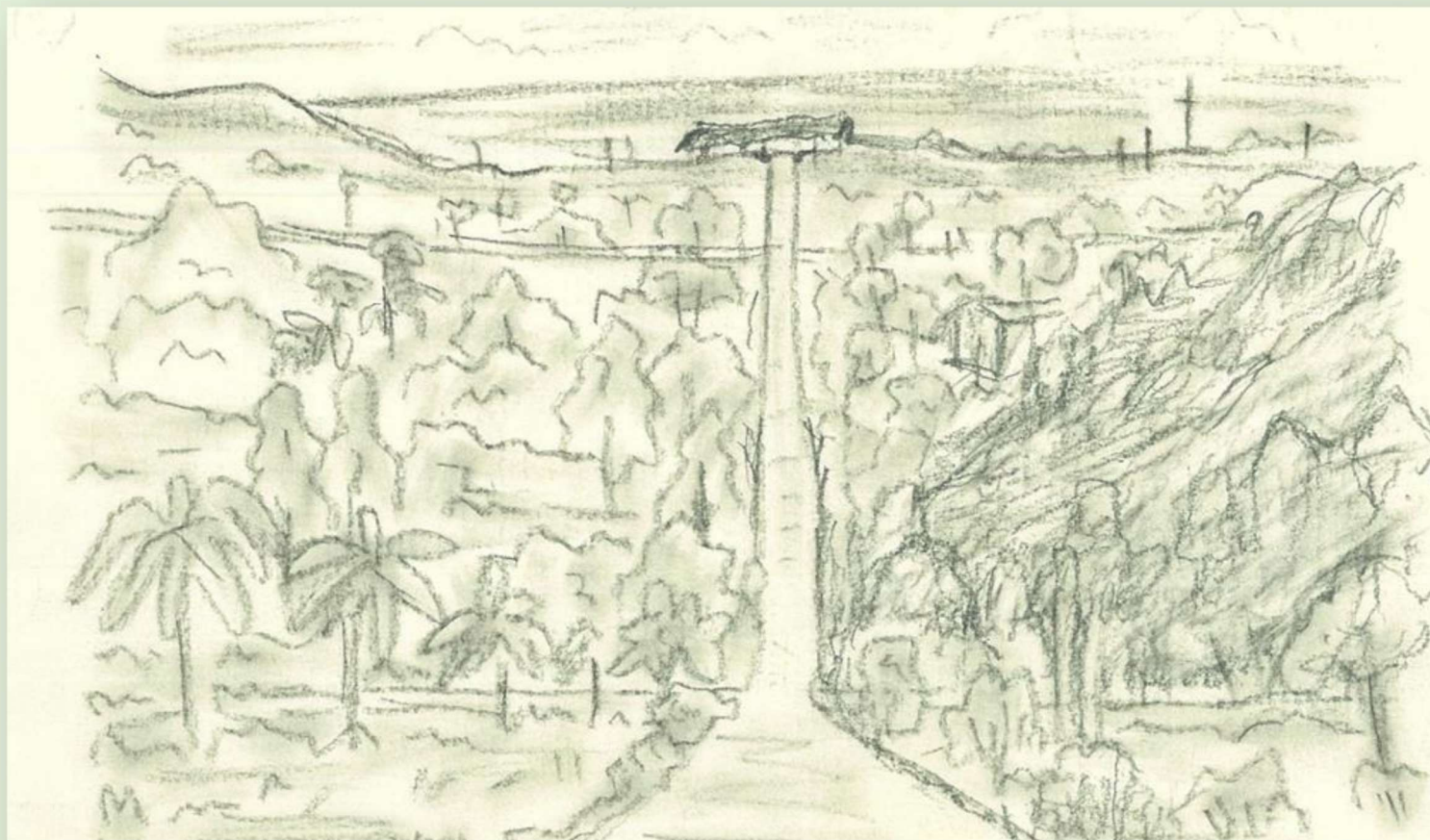
詩・工藤恵美子

絵・寺前佳名子

校門を出て Leaving the school gate

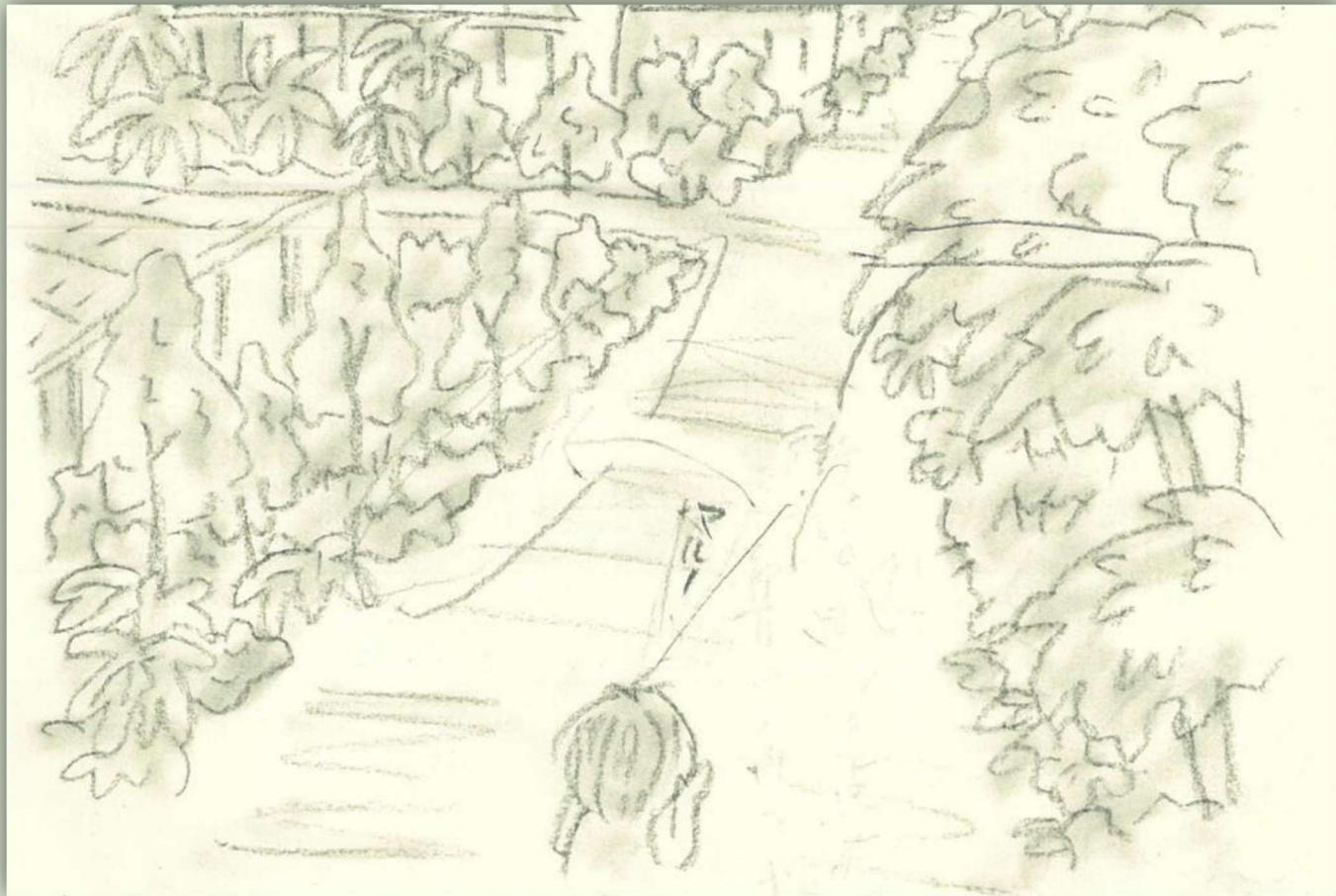


いっきに坂を下る I descend the slope in one gulp



通りの角で私は叫ぶ「マルー」

At the corner of the street I yell "Maru!"



どこからか 飛び出してくる

From where I don't know She springs out



まるまるとした背を 私の足にからませる

With her pulmp back She twines round my feet



あの日 On that day

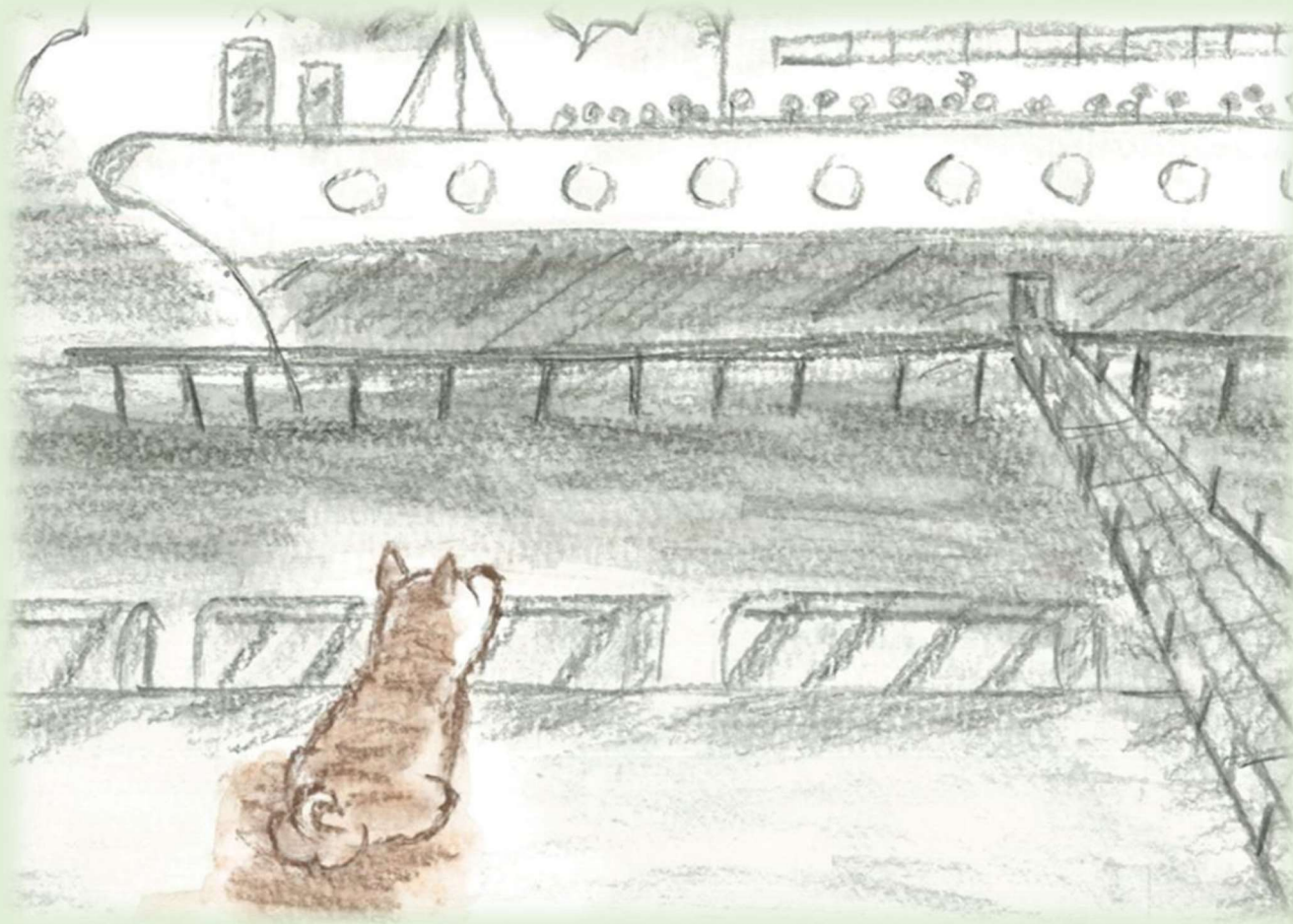
テニアン、グアムの玉砕

サイパン島を占領した米軍は、十日後の七月二十一日にはグアム島に、さらに三日後の二十四日にはテニアン島への上陸を敢行した。

テニアン島には日本の陸海軍将兵約八千百名と一般邦人約一万三千名、それに約二千七百名の朝鮮人がいた。伊豆大島をわずかに大きくしたほどのこのテニアンに 米軍はサイパンに匹敵する五万四千名の兵力を投入した。そして米軍は九日間で島を横断し、八月一日午後六時五十五分、指揮官のシュミット少将はテニアン島占領を宣言した。

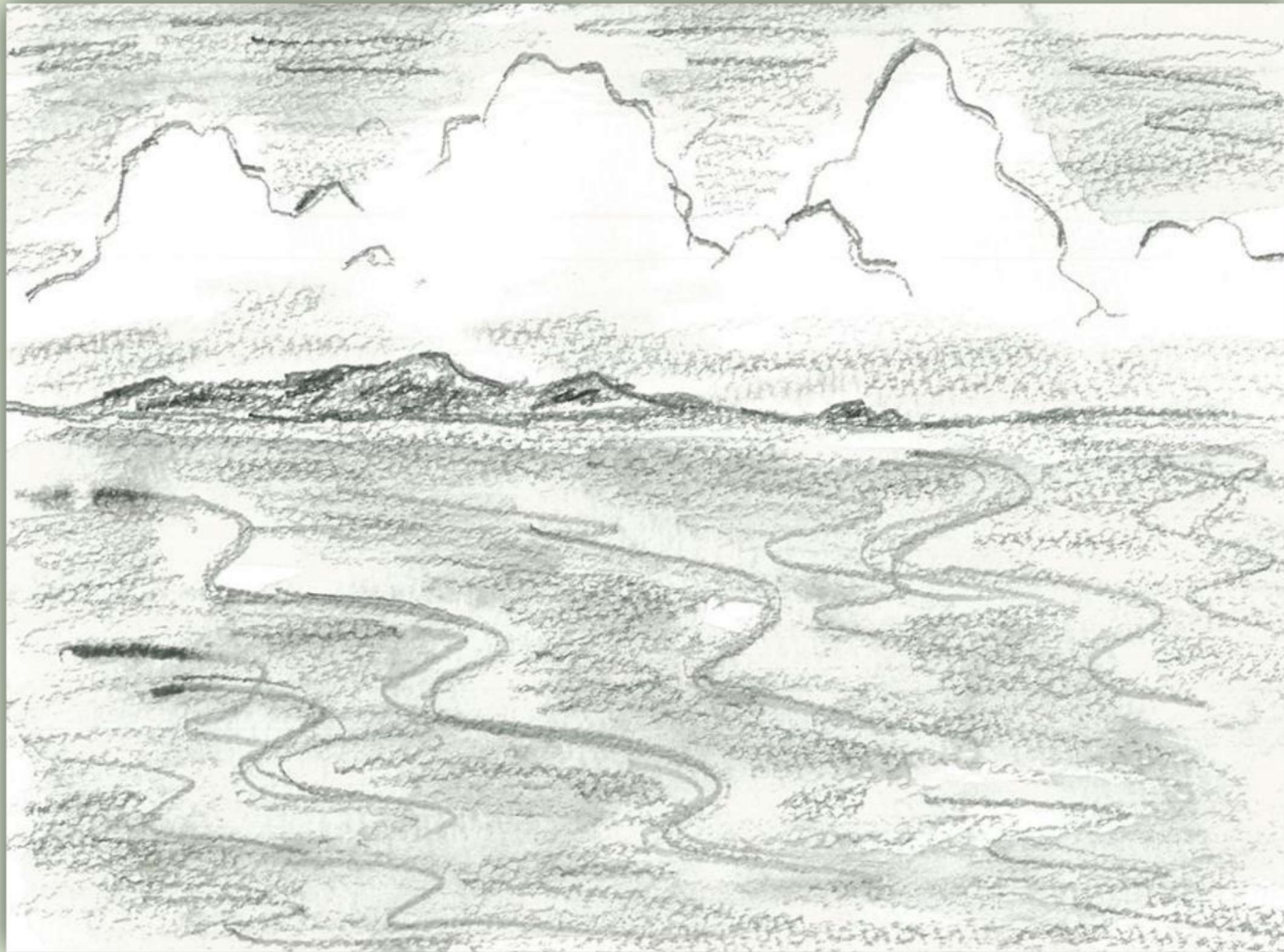
マルを残したまま 私は船に乗った

Leaving *Maru* there I took aboard the ship



南溟の島

On the island in the south ocean



今も桟橋で 待つ 私のマル

Maru waits for me at the pier



問いかけるあの目

With her questining eyes



わたしのマル

校門を出て
いっきに坂を下る
通りの角で
私は叫ぶ
「マルー」

どこからか
飛び出してくる
まるまるとした背を
私の足にからませる

あの日
マルを残したまま
私は船に乗った

南溟の島
今も栈橋で待つ私のマル
問いかけるあの目

工藤恵美子詩集「テニアン島」より

Maru—my Dear Dog

Leaving the school gate
I descend the slope in one gulp
At the corner of the street
I yell
“ *Maru!* ”

From where I don`t know
She springs out
With her plump back
She twines round my feet

On that day
Leaving *Maru* there
I took aboard the ship

On the island in the South Ocean
Maru waits for me at the pier
With her questioning eyes

英訳 (translation) 清野茂博

わたしの祈り

松崎 慧

工藤恵美子さんの詩集『テニアン島』は「私たちへの貴重な証言であり記録」（詩人・安水稔和さんの解説）です。戦争に対する無念な思いが、それぞれの詩ににじんでいます。

次のような詩もあります。

牛

牛が一頭

死の島を

さまよい歩く



わずか三行の短い詩ですが、私は福島第一原発事故（平成23・3・11）で家族の一員でもある犬やねこ、牛などを家や牛舎に置いたまま、郷里から避難せざるをえなかった福島の人たちのことを思いうかべました。そこに残されさまよい歩いているだろう犬やねこ、牛などのことを……。

戦時中（アジア・太平洋戦争）は馬も出征して行きました。軍用馬として。犬も供^{きょうしゅつ}出させられました。軍用